

特別講演会報告—中西 進先生のご講演より—

Report on the Special Lecture by Dr. Susumu Nakanishi

小林 俊 一 (こばやし しゅんいち)

特別講演部会 副部会長 金沢大学 准教授

1. はじめに

特別講演会は7月24日に、富山国際会議場大ホールにて開催された。講師は富山県立高志の国文学館館長中西 進氏、講演タイトルは「日本人の愛した大地」であった。ご講演に先立ち、大会実行委員会委員長 野田徹氏（国土交通省北陸地方整備局 局長）より挨拶、特別講演部会長 佐渡 正氏（館下コンサルタンツ 社長）より、中西 進先生の紹介があった。

2. ご講演概要

ご講演「日本人の愛した大地」は約80分の長大なご講演であり、その要点は以下の3つにまとめられる。

2.1 日本人は大地を人体として考えていた

今から約1300年前に編纂された古事記の大地誕生の神話は、精液が滴り落ちたことによって国土（オノゴロ島）が誕生した、と読み解ける。これは世界にあまたある創生神話の中でも、国土の誕生が極めて人間的な行為によって誕生したとする、非常にユニークな神話である。古事記にはさらに、オノゴロ島に誕生した二人の男女の神様が「みとのまぐわい」、つまり男女の結合によって次々と他の神様を産んだことが記され、次いで、生産の停止、つまり母神が火の神を産んで死んでしまうことを記述する。このとき父神は怒って、生まれてきた火の神を斬り殺すが、そのばらばらとなった部分から様々な山々の神々が生まれた。これら古事記の記述は、自然を人間と同様に考えていた古代日本人の自然観を反映している。

2.2 日本人は大地に対してたいへん敬愛の念を抱いていた

富山県の立山連峰に大汝山（オオナムチヤマ）というのがある。このオオナムチとは「立派な国土の主」という意味であるが、神話の1つに、オオナムチが海の向こうから船でやって来たチビツ子のスクナヒコと一緒に国造りをしたという話がある。これを「在来物だけでは国づくりはできない。常に新しいものが入ることによって国づくりができる」とする文化概念とみれば、日本人は国づくりの中に文化概念すら入れ込み、神話として語るほど、この国土に尊敬と愛情とを持っていた。さて、もともと日本人は小倉山、別名 甘南備山（かんなびやま）、神々のほつりを意味するなだらかな山々を、神様が坐す場所と考えていた。敬愛よりもむしろ限りなく親

愛を感じるかわいいお饅頭型の山が、山の美しい姿だと考えていた。その後、中国の影響を受け、富士山型の高くそびえ雲の上から麓を見下ろすような山に敬意を抱くようになった。小倉山から富士山への移行は、最初は親愛から始まって敬愛に移り、敬愛から尊敬に移るという愛のプロセスであり、日本人独自の山“観”である。山の裾野の形状に由来する枕詞「足引きの」の向こう側は、もはや人界ではなく神界である。山を敬愛の対象とする日本人にとって、山は神の坐すところであって、登るなんてありえない。そこには「山がそこにあるから山に登る」という西欧人とは、全く異なる山“観”がある。

2.3 日本人は大地からの恵みを受ける喜びに生きていた

我々日本人は、山、川、海、などを受け入れることで、その恩恵に我々が預かる、という大地“観”を持っている。最近流行りのサステナビリティという概念と同じである。換言すれば、日本人には、ある自然の状態に決して逆らわずそれを受け入れ、受け入れた上でそれをどうプラスに変えるか、そういう力が歴史的にある。さらに、見立て、もどき、やつし、といった第2の現実を作り上げる名人でもある日本人は、大地や自然からの恵みを受け入れる巧者である。

そして講演全体を「大地とは結論的にはもうひとつの私であった。だからそれを愛する、尊ぶ、恵みを受ける、そういう喜びの中に、日本人は大地と美しい環境に住んできたのだ。」と総括された。その上で、「美しい環境を持続させるために、如何に自然が私たちに対して計り知れない知恵を授けてくれるのか、専門家としてどうかお考えいただきたい」との宿題を頂戴した。

3. おわりに

中西 進先生は講演前日までインドに滞在され、帰国早々に京都から富山までお出ましいただいたが、80歳を超えているとはとても思えない、若々しくエネルギーに溢れた先生であった。さて、富山県の「立山砂防施設群」は、世界文化遺産登録を目指し関係機関が鋭意活動中であるが、ここには自然の力を巧みにいなしながら人間の営みを脈々と守り続けてきた歴史がある。中西先生のご講演は、我々地盤技術者に向けて送って下さった力強いエールであった、と言えよう。

(原稿受理 2013.8.31)

特別講演会

追記：特別講演会で講演をいただいた中西 進先生は、この度文化勲章受章の榮譽に浴されました。親授式は11月3日皇居で行われました。誠にありがとうございます。